
君がいたから

イチー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君がいたから

【Nコード】

N5828B

【作者名】

イチチー

【あらすじ】

俺はある平凡な中学生。だけど、俺はある女と出会い、恋をした。龍夜の恋愛を描いたストーリー！。

く出会い

あいつがいたから、俺は変わったんだ・・・。

小学校に別れを告げ、今日から新しい生活いや、新しい俺の人生が待っている。

俺の名前は龍夜^{りゅうや}。俺が生まれたときが竜神様を祭る夜（ど田舎の変な祭りだ）だったから、つけたらしい。

今日は中学初めての登校日。こんな俺でも少しは緊張している。

「龍くまでよー！！！」と後ろから声がした。呼びかけてきたのは俺の親友の達也。みんなからはタツって呼ばれてる。

タツは俺と同じミニバスのポイントガード。俺がフォワードで最高のコンビネーションを見せている。

まあ、自称だけだな。

「龍く今日から学校だな！！！楽しみー！！！女の子といっぱい仲良くなるうー！これが俺の第一目標！！！」と、のりのりのテンションで話してくるタツ。

「あー？めんどくせえよ！女なんかさ。俺はバスケ一筋だね！！！」

ぶっちゃけ、タツはモテる。なぜか、そのテンションの高さと茶髪

でシュツと整った顔立ちが女子はたまらないらしい・・・。

だが、背が高く、目つきの悪い俺はまったくいいほど女子に縁がない。

だから、バスケ一筋で生きてきた。

「はー龍はあいかわらずだねー」とため息をつくタツ。

「あーやべえ早く行かないと学校遅れるぜ？」と俺はいいながら、タツと走りなが学校に向かった。

「はーい、みんないるー？」と先生が声をかける。

はー間に合った・・・。とため息をつく、隣からクスクスと笑い声がした。

は？何で初めて会った女子に笑われてんの俺？

「なんだよ？そんなおかしい？」と少し怒り気味に言った。

「ごめーん！ちょっとおかしくって・・・それに私、入学式るときから見てたんだよ。あなたの事。」とよく見るとかわいい彼女がいた。

って、俺のこと見てた！？

「何で俺のことみてんだよ？」と尋ねると、

「だって、背が高く、目つき悪いってべたじゃん？ほかの女子も言

つてたよ。」と答えた。

はーなんだよ・・・中学でもそうかよ。

「まあ、よろしくね！わたしは絵梨^{えり}」

「なんだそれ？俺は龍夜。」

「うわー名前もこわっ！！！」といったので俺が怒ったまねをする
とエリがわらった。

もしかしたら、このときから俺はエリのが好きだったのかも知
れない。

だが、この出会いがあんな事態になるなんて思ってもみなかった。

〱一日の終わり〱

ふと、タツのことが気になり、あたりを見回すとタツはもう周りの女子と仲良くなっている。

は〱相変わらずだねえ……。俺とタツは偶然にも同じクラスで1部だ。

ところで、中学校には必ず悪のグループというものがいるものだ。リーダーを中心に回りに集まっている。

そんな、リーダーらしき男がタツのことをじっとみていた。

よからぬ事が起きなければいいが……。

授業がはじまり、学校の紹介をしていたりしてどんどん時が過ぎていった。

今日は初めての登校なので半日で帰ることになった。

帰りは、タツと一緒に帰る事にした。

「龍〱どうだった？お前の隣の女子なかなかじゃん！！」とタツが聞いてきた。

「あ〱そうだな。」とそっけなく俺は答えた。

「なんだよ〱もっと、テンションあげていこうぜ！！！俺なんかもう女子と仲良くなりまくっちゃったんだぜ！！！」と無邪気にいつ

た。

「お前な、健吾（あのグループのリーダーだ。気になったので調べておいた。）達に目つけられてたぜ？」と俺は忠告すると、

「誰だよ〜健吾って！」

「あのグループのリーダーっぽい奴だよ！」といった。

「だーいじょうぶだつて！龍は心配しすぎだつて。」

本当にそうならいいんだが・・・。

「まあ、気をつけろよな」といいさよならをした。

「バイビー〜！！！」と笑うあいつをみているとなぜか心配になる。

「なんかあつたらいえよ！」といい、今日は家にかえった。

「ただいま〜」といって、がばんを机においた。

母親はまだ家に帰ってこない。仕事で忙しい毎日だ。俺にとってはそのほうが都合だがな。

ベツトに寝転んだ。

「あ〜今日は疲れたな〜それにしても今日のあいつ、たしかエリだっけ・・・なんかきになるんだよな〜まあ、いいか」と考えながらおれは夕飯までゲームをした。

「龍く帰ってるの？ご飯よ。」と母親がいう。

俺は、ご飯を食べ、風呂に入りその日は就寝することにした。

明日もあいつと話せるのかなぁ……。タツのことも気になるし……。

いろいろ考えててもしょうがない！寝るか……。

しかし、明日は最悪の一日となるのであった。

く最悪の一日く

今日は、この学校に入ってから、2日目の登校日となるわけだ。

学校に着くと、エリがもう隣に座っていた。

「おはよう」とエリのほうから声をかけてきてくれた。

俺は少し照れながら、「おはよう。」と返した。

そんな感じで一日が過ぎていった。

「あゝ早く部活やりてえゝ！！！」といいながら廊下をあるいていると、（俺はだいたい休み時間や昼は一人だ。）後ろからエリが、

「何の部活入るの？」と言ってきた。

「お前、いきなり話しかけてくるんじゃないよ！」と俺がビックリすると、

「だって、龍夜って面白いんだもん。」

「ったく、お前なあゝ・・・。」

「龍夜のこと気になるっていつてる女子結構いるよ？で、なんの部活入るの？」といってきた。

って、俺が？まあ、そんなことどうでもいいので、俺は軽く受け流し、

「俺は、バスケ一筋だから！」と答えた。

「へえ、バスケやるんだ、バスケやってる男子ってカッコいいよね。って、龍夜はわからないけど！」

「つたく、なんだこの女子は・・・。」

「ってか、あれ達也君じゃない？龍夜と仲いい。」

「って、タツは君付けで俺は呼び捨てか・・・。」

「そんなことはどうでもいい、タツは何してんだ？」

「てめえ、あんまり調子のもてんじゃねえぞ？」とはくのついた声で話しているのは、健吾とそのまわりのグループだ。

「調子のもてんかないよ、ただ、女子とは仲良いいけどね！」と笑ってるのはタツだ。

「こんなときでもあいつは・・・。」

「その態度がむかつくんだよ！！！」と健吾。

「ゴメン！気にさわった？あ、あ、女子だったらこんな状況でも楽しいのに。」

「ほんとにあいつはバカだなあ・・・。」

「てめえ！ふざけ・・・。」

「ねえ、龍夜助けてあげれば？親友なんでしょ？」とエリがいった。
「たく、めんどくせえ・・・」

「てめえ！ふざけんじゃねえぞ！！！！」と健吾がタツに飛びかかろうとした。

「おい！お前ら何してんだ？一対大勢は卑怯なんじゃないの？」と俺がいうと、

「お前誰だよ？」と健吾。

「龍！」とタツがいった。

「龍だろ？つち、しらけたぜ。お前らいくぞ！」といって、いってしまった。

「龍、ありがとさん！」と軽々しくいった。

「お前なあゝ・・・。」

「あら？もしかして、俺、まずいことしちゃった？」とエリをみながらいった。

「ちがうよ！たまたまそこであっただけ！そしたら達也君をみかけて・・・」とエリがいう。

「タツでいいよ！エリちゃん！」

「あれ？なんで私の名前知ってるの？」と驚くエリ。

「当然じゃん！クラスの女子は全員覚えてるよ！」

「すごいね・・・」と少し引き気味になるエリ。

「お前ら、俺のこと忘れるなよ！とりあえず何もなくてよかったな
！」

「ゴメンゴメン！つい、女子と話すと。」と笑うタツ。

「ねえ、急がないと授業始まっちゃうよ？」

「やっべえ！行こうぜ！」

授業もおわり、帰ることにした。

エリと別れをつげ、タツと歩いていると、

「おい、龍夜君と達也君？」健吾だ！

「何だよ？」というと、

「お前ら気にさわるんだよ！」といって、殴りかかってきた。

ぶつちやけ、俺は自分で言うのも何だけど、喧嘩が強い。背が高い
ので負けたことはない。

俺がザコを3人ぐらい倒すと、タツが健吾にやられていた。

俺が、タツから健吾たちを振り払い、

「おい、タツ！大丈夫か？」と聞くと、

「っツ！油断しちゃった。でも、健吾って強いよ！」と喋ってきた。

「ったく、お前はそこで休んでろ！」といい、

「オラア！」といいながらザコどもを倒した。残りは健吾だけだ。

「お前なかなかやるな。俺のグループに入らないか？」と喋ってきた。

「フツ。ゴメンだね。」と、かっこつけた。

「俺が勝つたらもう、タツと俺にかまうな。」というと、

「わかった。」といって、殴りかかってきた。

健吾のパンチをかわし、顔を狙ったが、軽くよけられた。

そこで、蹴りをいれたが、とめられ、右アッパーが俺のあごにHI
Tした。

「俺のアッパーをくらって立ったのはお前だけだぜ。」と喋ってきた。

なんだ、このべたな展開。と思いつつ、あいつに向かっていった。

一発でもあたれば倒せるのに。そうだ！

健吾が蹴りをしてきたので俺はわざとくらい、その足をつかんで、健吾がバランスを崩したときにわき腹にくらわした。

あいつに勝った！

すると、健吾が立ち上がり、「もう、お前らには手をださねえ。」といい、重症の仲間を抱えて帰っていった。

少し、いい奴かもって思ってしまった俺だった。

俺はタツを抱えて一緒に帰った。

「ありがとー龍！お前がいなかったら死んでたよ。俺はいい友をもった！」と笑えない冗談をタツはいった。

「ったく、おまえは！もう、女子は程々にしとけよ！」

「それは、無理！」とタツがいった。

ほんとに、こりないやつ。

あゝ今日は疲れた〜といいながら帰ると、母親がどろどろのYシャツなどをみて、怒った。

しかたないか。

ベットに入ると、すぐに寝てしまった。

次の日、学校にいくと、エリが俺とタツをみて、

「バカじゃん！」といったので、俺は軽くエリの頭をたたいた。

「いったゝ死んだらどうすんのよ！」といったので俺とタツは、同時に「俺らの方がヤバイから！」といって、3人で笑った。

先生に呼び出されたが俺とタツは何もいわなく、健吾たちも呼び出されたが、俺たちがまた呼び出されることはなかったので、健吾たちもごまかしたのだろう・・・。

くバスケットく

あれから、約1週間がたった。

俺とタツとエリはあの1件があつてからかなり仲がよくなった。

「龍夜とタツはバスケ部でしょく？」とエリが聞く。

「まあねく俺らは最強のコンビだから!!」とタツがいう。今日もタツはテンションが高い。

「つてか、エリは何の部活入んだよ？」俺がきくと、

エリは「私はねえくテニス部！」と答えた。

「テニス部!？」二人が声をそろえていった。

「なにもそこまでおどろかなくてもいいじゃない。私と仲がいい先輩がテニス部なんだ！」とエリはいった。

「ふくん。でも、エリちゃんにはテニス部似合ってるよ!!!」タツがいった。今だにタツはちゃん付けだ。

「ありがとくタツはやさしいね!それにくらべて龍夜は・・・。」
「といって俺のほうをチラツと見る。」

「なんだよ?俺だつてやさしいんだぜ?な、タツ?」

「えくそんなことないなく」

「助けてやっただろっ！！！！」とタツを怒った。

そして、3人で笑った。

「じゃあ、みんな明日から仮入部だから頑張れよう」という先生の声がさよならの代わりだった。

「ついに明日からバスケット部に入れんぞ！！！！」と俺がいう。

「そうだな・・・。」

「何だよ？元気ないじゃん？」

「いや、そんなことないぜ？じゃまたな」

「おう！じゃあな！！！」

このとき、元気が無かったは明日になってわかるのだった・・・。

キュッ、キュッ、とバツシュの音が体育館に響く。

「あゝやっぱ、この音は最高だな。」と1人でいう。

なんでタツはいないんだ？タツは仮入部にこなかった。

「はい、次！」

先輩にせかされ、俺は自己紹介をした。

「さ、桜井龍夜。ミニバスでのポジションはフォワードです。」

「フォワードかあ、頑張つてな。」

「ハ、ハイ！」と緊張したのか噛んでしまった。

「はい、次」

なぜ、タツはこなかったんだろう……。後で、タツの家に行ってみよう。

「は？い？」とタツの母親ができた。

俺が、「すいません、タツはいますか？」と聞くと、

「あら、龍夜君？ゴメンね、今タツはコンビニに買い物にいつてると思うわ。」と教えてくれた。

「ありがとうございます。」といい、俺はコンビニに向かった。

「ッ！龍夜じゃん！！何してんの？こんなところで……。」

「何してんのじゃねえよ！お前なんでバスケの仮入部にこないんだよ！」俺は少し強めにいった。

「何でって、俺、バスケ部入らないから。」

「は？タツは何いってんだ？」

「お前、何言ってるんだよ！俺達で全国目指すっていったじゃんか。」

「お前、何夢みてんだよ。とにかく、俺はバスケはやらない。そういうことで……。」

あいつに、シヨックで何も言い返せなかった。タツの態度というより、タツと一緒にバスケットができないことの方がつらかった……。

とりあえず、俺は帰ることにした。

俺とタツはそれからきまなくなり、学校でも話さなくなった。

俺が、話しかけようとしても、あいつが俺をさけた。

なぜ、急にこんなことになったのか、俺は後で思い知らされることになる。

く救えない闘いく

あれから、1週間がたちもう学校にもなれてきた。

だが、俺はいまだにタツとの関係を取り戻すことができていない。

「ねえ？なんで急に話さなくなっちゃったの？」エリが聞いてくる。

「俺だって知りてえよ・・・。」俺はそう答えるしかできなかった。

「なんでえ？話しかければいいじゃん！」

「そう簡単にはいかねんだよ！」

「だって、あんなに仲良かったじゃん。」

「だからだよ、俺たちの仲だからできねんだよ・・・。とりあえずお前は黙っとけ！！！！」苛立ちとストレスからか、エリにきつくあたってしまった。

「ごめん・・・。」

やってしまった・・・

今日の帰り道前にタツが歩いていた。

俺は話しかけることにした。

「おい、タツ！」

「・・・・・・・・・・。」

「なんで黙ってんだよ？」

「うるさい・・・・・・・・。」

「え？」

「ほっとけっていつてんだよ！！！！！」

俺はむかついた。

バキッ！俺はタツの顔を殴った。

「いつてー！何すんだよ！」

「お前ふざけんなよ。お前おかしいんじゃないか？なんで俺を避けるんだよ」

「龍夜にはかんけないだろ・・・・。」

「お前と俺の仲でいえないことなんてないだろ！一人で抱え込んでいるんじゃないよ！！！」

「龍夜だからいえないんだよ。しょうがねえ・・・・。」

「いいか、よく聞けよ？俺は白血病なんだよ。」

白血病？

「俺の場合は、進行しすぎてもう手遅れなんだよ。薬の投与でギリギリ2ヶ月つてところだつてよ。」

「なんで今まで黙ってたんだよ？」

「お前にいったら、どうせ心配すんだろ？だから、いわないようにしてたんだよ。」

「でも、今までは普通だっただろ。」

「本当は小学校の頃から病気だったんだよな。だけど、最近になってそろそろ入院しないといけなくなった。だけど、俺がいきなりいなくなったらあれだろ？だから、俺はわざと龍夜から離れて龍夜が俺を心配しないようにしたんだよ。」

俺は聞いてショックだった・・・

「お前・・・でも、それは許せねえ」

「は？龍夜？」

「そんなのお前だけつらい思いしてんじゃねえか！俺らはいつも一緒だっただろ！だから1人にならないで、残った人生を楽しもうぜ！！！！！！」

「龍夜・・・ありがとう・・・でも、エリには秘密にしといてくれるか？」

「わかった。」

それから、俺らはまた3人で楽しんだ。

「ふん、ただ喧嘩してただけだったんだ。」

「まあね、俺ら単純だから！」とタツはいう。

「つかよ、せつかく3人で遊びにきたんだからなんか買わねえ？」

「いいね、俺、帽子買いたいな。」

「帽子、まあ、いいんじゃない？」

「ねえねえ、これ、タツににあうんじゃない？」

「エリちゃんはセンスいいね！」

「おお、似合うじゃん！緑でいいかんじ。」

「よし！これで決定！」

「ねえねえ、この写真楯よくない？」

「じゃあ、3人の写真撮って入れようぜ！」

そんな感じで時は過ぎていき、ついに、タツは入院した。

ガラガラッ・・・

「おい、元気か？」

「まあまあかな！」

タツはいつも買った帽子をしていた。

「お前いつも、その帽子してんのかよ？」

「いいじゃん！気に入ってんだから！」

「まあ、いいけど・・・。ってかよ、大丈夫なのかよ？」

「うん、平気かな・・・。」

「日当たりいいよな、この部屋？」

「・・・。」

「ん？」

「おいっ！タツ？何してんだよ！！！！ちょっと待ってるよ！」

そっいつて俺は、看護婦を呼びにいった。

俺は手術室の前にいた。

「ありがとね。龍夜君。達也は、病氣と知ってから全然元気が無かった。だけど、龍夜君とあうたびに笑顔を取戻していったわ。中学に入学してからは、毎日が楽しそうだったわ・・・」

「はい・・・」

俺は、何もしゃべることができなかった。

タツとのコンビネーションで勝ち続けたバスケット

つまらない学校を楽しみに変えて

中学で俺にたくさんの友達をつくってくれた

タツがいなかったら俺は喧嘩の毎日だった

俺の人生はタツが助けてくれてたんだな・・・。

そのとき、ドアがあいた・・・。

「残念ですが・・・

俺は頭が真っ白になり、

「タツーーーーー」 と叫んだ。

学校で、先生が話している。

俺は何も考えずぼーっとしていた。

タツの知らせを聞いたとき、エリが泣いていた。

俺はなににもできず、ただエリのそばにいてやった。

「なんで、タツが……」

俺は、死にたいくらいつらくなった。

俺とエリは葬式の後に、タツの病室にいった。

すると、棚の上に1つの写真たてと帽子があった。

俺は気づいてしまった。タツが帽子なのは髪の毛がなかったからだ。

なのに俺は……タツは病氣と闘っていた。

3人で仲良く笑っている写真を見て、エリは泣いていた。

ふと、俺は棚を開けた。

すると、1冊のノートと手紙が入っていた……

～日記～

* 今日から、中学校生活がはじまる。

こんな俺だけど、最後まで日記を書こうと思う。

龍夜がバスケット部に入ろうといってきた。俺は入れないのに・・
・。

* 今日は、健二というヤツにからまれた。

そしたら、龍夜が助けてくれた。

俺は、病気で何もできなかったが、龍夜がすべて倒してくれた。

* 喉が痛いので、病院にいった。

入院することが決まった。

* 龍夜はあいかわらず、つまらなそう。

* 喉の痛みが酷い・・・。

* エリのおかげで、龍夜がかわってきた。
いいことだ。

* 学校生活が楽しい。入院したくない・・・。

* 今日から、仮入部がはじまる。
龍夜から、離れよう。

* 今日、龍夜にすべてを話した。
そしたら、お前だけの問題じゃねえといわれた。
かなり、嬉しかった。

* もうすぐ、入院がはじまる。

* 今日は3人で遊びに行った。
帽子をかった。写真たてもかった。
いい写真が撮れてよかった。

* 今日から入院生活だ・・・

* 薬のせいかな、髪の毛が抜けた。
帽子を買ったとてよかった。

* 死ぬのかなあ・・・。

* 龍夜がきた。髪はばれてない。よかった。

*みんなと会えないと寂しい・・・。
死にたくない・・・。

*肉がくいてえ・・・

*龍夜・・・ホントにありがとう。
エリ、龍夜を頼むわ。

*多分、明日・・・

ここで、日記は終わっていた。
エリは泣いている。
俺は、手紙を読んだ。

龍夜、俺はもういないんだろうな・・・死にたくなかったけど、し
ようがないよな・・・。

俺は、龍夜にあえてよかったぜ！

龍夜はエリにあってから変わった。

きずいてないと思うけど、ぜんぜん違うぜ？

俺がからまれた時、すぐに助けてくれたよな？かなり嬉しかった。

龍夜に癌と言うのが本当に怖かった。

でも、龍夜はお前だけの問題じゃねえと言ってきて本当にうれし
かった。

お前はエリと幸せになれ！
俺の分まで生きてくれ！
だから、頑張れよ・・・

俺は涙が止まらなかった。
本当につらいのはタツのはずなのに・・・。

「龍夜！早くいこ！！！！」
「わかってるよ！ちよつと待てよ！」

俺はエリと付き合っている。
俺はタツの分まで生きることにした。
だって、あいつと永遠の約束をしたから・・・

ゝ日記ゝ（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。
恋愛とは、違っていました。が、最後までかけてよかったと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5828b/>

君がいたから

2010年10月20日11時02分発行